

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 夏目漱石『それから』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 51 回のツイキャス読書会の課題図書は、夏目漱石の『それから』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

それから 夏目漱石 読書感想文

「三四郎」の美禰子は、イプセンの女のようにだった。

美禰子が三四郎と野々宮を捨てて、さっさと自分の結婚を決めたように代助も三千代を「すてた」のちに、さっさと親の言うとおりの結婚をしていれば悲劇は起きなかった。

「無意識の偽善者」である代助に悪意はない。

男としてはどこか頼りなく心もとないが、美意識が強いために神経が細やかで、強引に我を通すタイプではない。

優しいのだと思う。だけど、その優しさは罪深い。

三千代を平岡にゆずった後悔を、「自然の復讐」と考え、
独り身でいることを罰として受け入れてきたが
つじつまの合わない自分の気持ちに気づくのは、再開した三千代への同情から。
同情からはじめる恋愛は自己愛に陥りやすい。自己愛強めな代助らしい恋愛感情である。

近代人にとっての自由とは。

世間で生きるための、自分らしくあるための苦悩を漱石先生らしいフィロソフィで小説の中に込めている。

いい年になった30歳。職業の為に汚されない内容の多い時間を有する、上等人種だと自負していた。

それが、親の会社経営に不安材料があったのか

長井家の安泰のための政略結婚をせまられ、世間が遊民でいられることを許してくれなくなってしまった。

ここまで来てしまったら、進む道はどの道、袋小路じゃないだろうか。

ではどのように自分に折り合いをつけてゆけばいいのだろうか。

ふと自分の30歳に置き換えてみたら、

そのときから今までも、世間や自分と折り合いをつけているつもりで、

たいして代助と変わらぬ、妥協できていない部分に気づいて苦笑する。

わたしは代助ほど神経質ではないけれど、いざというクライシスが来た場合は笑ってやり過ごせるくらい
普段からユーモアを交えて過ごすのが得策だと思う。

「代助はやっぱり麴麴を食べていた。」

門野が新聞読んで朝から騒いでいても、吾関せずの心持ちでいられる幸せがまた戻ってくるといいのにと、叶わぬことを願う。

代助には、ユーモアが足りていない。

(おわり)

●あらすじ

代助は実業で成功した裕福な家に生まれた。30になっても仕事をせず、父からお金をもらい暮らしていた。そんな父もさすがに「少しは人の為に何かしなくては心持が悪いのではないか。金は自分が出してやるから何かするがいい」と諭す。

代助には平岡という銀行勤めの友人がいたが、不祥事の責任をなすりつけられ辞めることとなった。平岡は「なぜ働かない」と問う。代助は「衣食に不自由のない人が、ものずきにやる働きでなくちゃ真面目な仕事できるものじゃない」と言う。平岡が「すると君のような身分のものでなくちゃそんな仕事はできないわけだからますますやる義務がある」と返し、代助は答えられなくなる。代助の兄の嫁の梅子からはしきりに結婚をすすめられる。

やがて父からも結婚をすすめられ、相手も紹介されるがそこには、事業や家を守ろうとする政略結婚的側面があった。代助ははぐらかし続けたが、平岡の嫁の三千代と関係をもつ。しかも、彼女と平岡との結婚をすすめたのは代助自身だった。

父からは勘当される。兄から「貴様は馬鹿だ」と一喝される。

代助は仕事を見つけに出かけた。

●感想

今年(2017年)は夏目漱石生誕150年です。100年以上前の方が書いた作品ですが、就職や結婚といった人生の節目で悩む人の姿を描いたようにも見え、あまり古い感じがしませんでした。

人は仕事をするものだ、結婚するものだという社会通念に対し、あくまで個人の自由な意思(やりたいと思える仕事がないからしない。本当に好きな人と結婚する。)を通した代助はペナルティーを課されますが、社会(世間)の意に反するようなことを通すのが容易でないのは現代でも変わらないなと思いました。

父から金を出してやるから何かするがいいとまで言ってもらったのに、このような結果となった代助はもったいないと思いました。

もっともそれは、人生において何をなすべきかを見出せなかったことが悲劇の始まりにも思え、それも自由の功罪なのかもしれません。

(おわり)

「それから」感想文

～こじつけ解名辞典～

- 菅沼三千代… 沼は身動きが悪くなるので、代助には不運を招く。
三は別れて三年を表すが、千代がついているので、気持ちの上ではそれ以上長く代助を好きだったことを表す。
- 長井代助… 平岡に代わって、結婚の手助けをしたことを表す。
- 長井得 … 永い間、井という狭い見識にとらわれ生きていること、得もして生きていることを表す。
- 長井誠 … 長井家の家風に対して誠実に生きていることを表す。
- 長井梅子… 長井家で、いい塩梅に、調整役をしていることを表す。
- 平岡常次郎 … 常づね、平等という理想を小高く掲げていることを表す。
- 門野 … 野は自然を表し、代助を自然人になる門を用意したことを表す。

賛否両論待っています！

(おわり)

それから 読書感想文

もともと臆病で用心深い代助は世の中に出ていく事に恐れがあったのではないかと思う。親の庇護の下、何不自由ない生活。父親の援助を受けている事は普通であればコンプレックスになってもよさそうだが、強い自負心からか、極端な美醜のこだわりをもつためか、麵麩のために働くのは卑劣であり世の中が悪いから働かないと、頭の中で自己を高尚な立場におき、父親や平岡を軽蔑し自己正当化している。代助が人生の駒を進めるには、自然から発生する必然が必要だった。三千代の平岡からの救出がそれだった。しかし経済的自立がなければ何かを選び取ることはできない。自分の心の正義を世間と関わる以上押し通す事は難しい。代助は最後、墮落していくように書かれているが、私は希望をみた。代助を追い詰めたのは代助自身であり、世間に放り出されることでアンニュイな夢から覚め、現実が鮮明に見えてきたのだ。これから代助の人生が始まると思った。

(おわり)

『それから』 感想文

私は夏目漱石の三部作と呼ばれている作品は死ぬまでには読みたいと思っているのでこの作品はずっと前に購入しました。

最初の椿がすごく印象的ですが、門野が出来たあたりから読むのがしんどくなってずっと置き去りになっていました。

今回は絶対に最後まで読むぞ！ と読みはじめて一応最後まで読みましたが、文章の内容とか、細かいところを理解するのは難しいなと思いました。

私が気になったのは時々登場する花です。

最初は椿。でも椿といっても八重の椿と書いていて調べたら私が想像する赤い花びらの真ん中に黄色い雄しべが存在感を出している感じではなくて花びらがたくさん重なった大きな椿で、なぜ八重の椿なんだろう？と気になりました。

その後も、鈴蘭、薔薇、百合が出てきて、私はとくに鈴蘭の匂い立つ様子が伝わってくる感じがすごく綺麗で好きな所です。

共感できたところは、

(引用はじめ)

夜、蒲団へ這入って、好い案排にうとうとし掛けると、ああ此所だ、こうして眠るんだなと思ってはっとする。すると、その瞬間に目が冴えてしまう。

(引用おわり)

私も夜寝るのが得意じゃなくて代助と似たところがあると思いました。

私も鈴蘭の匂いを嗅ぎながらお昼寝してみたいと思いました。

夜、寝るときには代助なりに色々考えるところがあったのかなと思いました。働いてないから体がそれほど疲れていないから眠れないというのもあるかもしれないけれど、少なくともなにも考えずに気楽に暮らしていたのではないように思いました。

楽に生きようと思えば父が勧める相手と結婚すれば良かったけど、そうすると何の為に生きているのか分からないまま人生を終えてしまう気がしたからかな？と思いました。

馬鹿だけど、純粋な代助をだれか助けてあげてほしいと思いました。

(おわり)

『それから』 感想文

坊っちゃん、こころ、三四郎しかまだ読んでいないのですが、今回の『それから』が一番ワクワクしながら読めました。

当時の不倫と言うのは、罪だし家族からも勘当されるし、今よりもっと大変な事なんだなと思いました。

今の世の中も不倫が多すぎるので、姦通罪に変わるものがあれば芸能人や国会議員などは減るのではないかなと思いました。

しかし、不倫の中にもピュア？ というか、この代助のような例もあるので、罪にするのも難しいですね。

『それから』の、代助、三千代、平岡の三角関係って、誰が悪いとか無いような気がしました。

代助は昔から好きだったのにも関わらず平岡に三千代を譲ってしまうし、平岡は結婚しても仕事の不正などで三千代を苦しめてしまうし、三千代は代助に生活苦を求めてしまい代助が三千代にハマるというぐちゃぐちゃな感じが不倫なんですか。

その中で、二人だけの関係が気付けてしまえば、残りの1人は介入出来なくなってしまうので、平岡自身にも責任はあるなと思いました。

読んでみると、代助は相当父親が嫌いで、何度も結婚を強要されて、親の価値観を押し付けられてしまうのはお気の毒に思いました。

しかし、最後は、父親の代わりに来た誠吾に《貴様は馬鹿だ！》と怒鳴られても、三千代を選んだ代助は自分自身で決めた人なので、周りからの評価として道を踏み外したと思われても、自分なりに納得して生きていけると思いました。

ただ、ひとつ気になるのは、238ページで三千代に会った後の代助が、門野に顔色が悪いと指摘されたのは、まるでノルウェイの森の阿美寮で直子に会った後のワタナベ君みたいだなと思いました。ラストで、《赤》をひたすら強調して描写されたが素敵だなと思いました。

『門』も楽しみにしています。

宮崎駿さんは、『草枕』がフェイバリット本だそうなのでいつか取り上げてくれると嬉しいです。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 <https://ameblo.jp/inoman-1984/>

「それまで それから そのさき」

十五歳、十八歳、二十二歳、三十七歳、そして昨日。僕は、記憶にあるだけで少なくとも5回、夏目漱石の「それから」を読んだ。

一八年前、当時大学生だった僕は、出版されている村上春樹の作品を全て読み終え、「それから」を再読した。意識的にこのように読み進めたわけではない。村上春樹が面白いから読む。卒業論文のテーマは夏目漱石。となると、必然的にこの二人の作家の間を行き来することになった。

就職はしない。自分の人生を会社に捧げるのはナンセンスだ。ふとそう思い、大学最後の夏はヨーロッパを旅しながら、その合間に卒業論文を仕上げることにした。つまり、その時の僕の大きなリュックサックには、漱石の本が入っていたわけだ。

それから十八年が経ち、僕は画家となっている。画家になる努力を十四年してきた。そして今後、文字通り一生、その努力をしなければならないのだろうと思う。数学のように明快な答えもなく、誰かがコンパスを差し出し、向かうべき方向を指し示してくれるわけでもない。

暗中模索、五里霧中。（ここ、ラップ調子で御願い致します）

人生の九割は、苦しみや絶望でできている。僕は人生の早い段階から、このように自分に言い聞かせている。ネガティブに思えるかもしれないが、漠然と何かに期待して、いたずらに時を過ごし、人生の純度を薄めてしまうというのは、人間の最も重い罪の一つだと考えている。自分で考え、自分で行動し、結果が出ればそれが正解。失敗すれば自己責任。もちろん代助のように、迷い、後悔し、途方にくれる事もある。

しかし、このような苦しみを超えてこそ真の自分に近づけるはずだ。

（おわり）

夏目漱石 それから 読書感想文

大学を出て職に就かず結婚もせず、文学と音楽と芸術と生きる高等遊民の代助。この「人はパンの為に生きるに非ず」を実践するかのような男を多くの世間の人は批判するでしょう。先のフランス大統領選で極右政党の党首と決選投票になった中道のマクロン氏に対して「極右の候補者が勝つのは嫌だけど、マクロンが大差で勝つのも嫌だから、彼は僅差で苦しんで勝てばいいんだわ」と言っていたフランスの有権者のことが頭に浮かびました。確か韓国の現大統領は貧しい家庭に育ったということも支持を集めた要因だと報じられていました。

お金のあるなしで人間の価値を決めてしまえるのなら、生まれた時からお金に不自由したことの無い代助は、彼自身が思っている通り変わらない人なのでしょう。

私は彼が平岡と三千代に語った「なぜ自分は働かないか論」には今の日本の状況も重ね合わせ肯かされてしまったし、後からそれは自分だけに言えることだと平岡に語ったところや、三千代が代助に金を借りに来た際にすぐに貸してあげられない自分が以外にも金に不自由している男だと気付く点など、こいつはこれで憎めない奴だなと思いました。

平岡は大阪に行って仕事と人間関係と金のせいで自己を見失い、愛する三千代の心までも見失ってしまった。翻訳の仕事でなんとか食いつないでいる寺尾も変わってしまった者の一人だろう。

誠実さと熱心さを持って、儲けなくてもいい、奉仕でもいいから働け、お前はいくつになる？ 俺もそうは長くはないから俺を安心させるために嫁を貰えという父、得。代助が遊びに興じて作った借金を何も言わず肩代わりしてくれていた兄とその嫁も「お父さんを安心させてあげなさい、あなたは誰だっていいんでしょ」と代助に結婚を促す保守的な考えの持ち主。

自己とは何であるか、何の為に生き、誰の為に何をなすのか。私も考えました。

最近思うのは自己自身をしっかりとって、自分は自分の為に生きる。そして自分で決めたなすべきことを行っていく事だと思います。仕事も結婚も子育ても周りに流され、思考停止になってはいけない、そりゃ心身ともに疲れますが。

黄金でも真鍮でもいい。人間は、神が自分に似せて泥をこねて作った人形みたいなものだと言っている人もいるし、人間死んで燃やされれば骨になって土に帰る。貴方は世界が燃えるような覚悟を決めたなら、あなたの人生を生きればいい。そのまま雷に打たれてしまうまで、と代助と自分自身に語りかけて感想文を終わります。

(おわり)

『男性が仕事を持たない豊かさとは』

平岡「僕は僕の意志を現実社会に働き掛けて、その現実社会が、僕の意志のために、幾分でも、僕の思い通りになったと云う確証を握らなくっちゃ、生きていられないね」新潮文庫 p100 4行

代助「日本対西洋の関係が駄目だから働かないのだ。(中略)こう西洋の圧迫を受けている国民は、頭に余裕がないから、ろくな仕事は出来ない。(中略)今のようなら僕はむしろ自分だけになっている。そうして、君のいわゆるありのままの世界を、ありのまま受け取って、そのうち僕に最も適したものに接触を保って満足する。進んで外の人を、こっちの考え通りにするなんて、到底できた話じゃありゃしないもの」p103~104

この二人の対話を聞くと、平岡の説明の方が現実的だし、代助は苦し紛れの言い訳のように聞こえる。しかし、私はこのトシまでずっと平岡的発想で社会と折り合おうとしてきたつもりだが、それで何かいいことがあったのか？と考える。

代助は打算を捨てて三千代をもらう覚悟をしたが、これは、体面を重視する平岡的発想からは生み出されなかったと思う。私は、そのことで代助に好感を持った。

信州読書会さんが最近コラムで、これからの時代、人が従事できる職業が減り、社会で自己実現できるフィールドが減る事を書いておられた。そうすると、代助のように、社会を信頼できず、自分から社会に見切りをつけて社会に出て行こうとしない人がますます増えていくのではないか。残念ながら、代助の時代よりも、現代の方が、仕事を持たない男性を受け入れる社会のヒダが短いと思う。多様性を受け入れる包容力が失われつつある。

しかし、代助のような男性がいてくれないと、山のように存在する三千代のような女性が救われぬ。代助の決断は、金銭的に逼迫していないがゆえの気持ちの余裕がもたらしたものののだろうか？ ならば、これからの待ち受ける貧乏生活で代助はこれまで経験したことのない貧乏生活に耐えられず、破綻するのだろうか。できれば、そうではないことを信じたい。代助と三千代はこの先どうなったのか、とても気になる。

『それから』の続編ってあったっけ？

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 赤と白 』 ～代助、ちょっといい？～

代助、あなたは周囲からお金を頼られて、且つ自らの思想の為に働かない選択ができる身分にあったわね。

でも、三年ぶりに再会した平岡さんは「現実と悪闘」していて、かつてあなたと通じていた言葉が通じなくなっていたよね。その件は、私にも少しわかる。私の母も社会に出て働いたことがないものだから、私は母と仕事の話は一回もしたことがない。たぶん、仕事に関しては母と言語が別なんだとわかってるから。それか、あなたと平岡さんみたいに働く意義の議論が平行線のままになるでしょうね。

但馬の友人も、あなたから送られた西洋の文学書を読む気がしないくらい生活や家族に執心している手紙をもらったわね。かつてはあなたと同じ傾向を持っていたとしても、人生の段階が進むとそうはいってられないよ。代助のように五感を鋭敏に日々を過ごすことはできないの。

でもさ、人生ってそう思い通りにはならないもんよね。あなたは、三千代さんに再会して、自らの力でお金を工面することもできない、意に添わない縁談を断れる身分ではないって自覚したわね。働かない「選択肢」は持っていたけど、自分で人生を決める「自由」を持っていなかった。自らの人生をコントロールしているつもりが、長井家の庇護の世界だった。でもね、私は三千代さんに再会できてよかったと思っているの。金剛石より馬鈴薯に嚙り付く決心をさせてくれたんだから。ただ、他人の奥さんであったことは代助の責任が大きいと思う。自らが過去に見送った想いが三千代さんの辛い状況で再燃するのはわかるけれど、代償が大きかったわね。自らの想いを通すって、実は「責任」と「孤独」がセットなの。それを証拠に、長井家から勘当されちゃったでしょ。

三千代さんとの思い出の百合の花の色が、まるで純粹の象徴みたいな真っ白だったわね。忘れていた情熱を思い出すかのように、かぐわしい香りも三千代さんと共有できたみたいだし。もう二度と「何故棄ててしまったんです。」という台詞をいわせないように。

ただ、あなたが職を探しに飛び出した際に、焦りや高揚感で「赤色」に包まれるでしょ。それが、初めて自らの人生を動かす充実感の色になればいいけど、地獄の業火にもなりえることも忘れないように……ね。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

「情に棹させば」

代助は、自分の必然性については、自覚している。親の仕送りで働かずに一軒家を構えて暮らしていることについて、どういわけしているかというと、『親父も兄貴も、支配階級にいて、濡れ手に粟で儲けているだけで、決して実力で儲けているのではない。』ということだ。うしろめたさはない。一方、世間では実力がモノを言うと信じていた平岡は、大学卒業後に銀行員となるが、実力を活かしきれず、腐ってしまう。

代助は、平岡が世間で通用しない理由を知らない。代助の兄と平岡は、どちらが実力のある人物であるか、それは、比べようがないから判別がつかないが、少なくとも両者の間に「必然性」の差がある。持つものと持たざるものとの。平岡は、実力があっても、資産も縁故もない。代助の兄は、資産と縁故を持っている。どうしたって、代助の兄に軍配が上がる。

ここに、不公平がある。実力だけが世間を動かしているわけではない。金持ちの家に生まれれば、資産があるから一生金持ちだ。縁故がある家に生まれれば、それだけチャンスに恵まれる。必然性に気がつくというのは、最初から与えられている不公平さを自覚することだ。

生来の特権によって恩恵を受けている代助が、生来の不公平によって理不尽な思いをして、三千代に辛くあたる平岡に同情するというのは、矛盾した話だ。そして、三千代を譲ってくれと頼むに至っては、さらなる矛盾である。

カードに裏表があるように、繁栄の裏には貧困があり、支配の裏には隷属がある。

不公平の犠牲になっている三千代に同情するのは、偽善的な態度だ。代助は自分が働かなくても生きていける客観的な条件を、十分検討していない。自力では、彼女を救えないくせに、なぜ、彼女の人生に深く干渉するのだ。

恋心に突き動かされてとか、焼けぼっくに火がついてとか、代助の出来心を責めることはできよう。

三千代の駆け引きも、きわどい。

ハムレットではないが、『弱き者よ 汝の名は女なり』 心変わりとは、誰のせいだ。

情に棹させば流される。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343